

.....

うきたむ考古通信

.....

2019年3月号

■発行者	うきたむ考古の会
事務局	山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 内
	〒992-0302 山形県東置賜郡高島町安久津2117
	電話0238-52-2585 Fax 0238-52-4665

今年は雪融けも早く、館の周囲の雪もほとんどなくなりました。今後の天候が安定して推移するよう祈っています。

館共催事業の報告

👤第XⅢ期うきたむ学講座が終了しました

第1回講座：平成31年1月13日（日）

XⅢ期うきたむ学講座の第1回講座は戊辰戦争150年をテーマとした下記の二つの講義がありました。

- 講座①「米沢藩の軍制改革－西洋流砲術導入をめぐる諸問題について－」
布施賢治氏（米沢女子短期大学）
- 講座②「東北から見た戊辰戦争」
渡部 幸雄氏

都合により順番が逆転し、最初は渡部幸雄先生による「東北から見た戊辰戦争」、次に布施賢治先生による「米沢藩の軍制改革－西洋流砲術(高島流)をめぐる諸問題について－」という演題でした。渡部先生にはご自身の著書の内容についてお話をいただきました。会津藩は藩主松平容保公が京都守護職を受けた時点で、後の戊辰戦争の敗戦が運命づけられていたこと、米沢・仙台藩も列強との近代戦争の経験のある薩摩・長州の装備とに決定的な差があり、勝てる戦争ではなかったこと、著述するなかで、無謀な戦いに命を落とした方々に思いを馳せ、著作刊行後に慰霊祭を行ったことを淡々とお話しされました。もともと、勝てる戦ではなかった、徳川宗家のために忠実に守護職を全うした会津藩の痛苦は余りにも悲劇的という語りが印象的でした。

布施先生のお話では、米沢藩に残る文書史料から西南日本の諸藩に遅れたものの、西洋砲術を導入し、西洋式を取り入れた諸藩との交流を広げて、藩内で演習も行っていたことが分かること、和式砲術は各流派が流派毎に伝えていくのが原則であったが西洋式ではこういった訓練は実用的ではなかったこと、西洋式の大砲や銃も藩内での製作を試みたがうまくいかず結局は輸入に頼ったこと、藩内でも後半には砲術各派の代表的な人物も西洋式(高島流)の訓練を受けたが、これは藩を挙げて西洋流に変わったことを示すものだったことでしたが、それが実戦でどのくらい役立ったかは分からないということでした。また、

西洋式砲術採用は藩士間の身分的格差が邪魔となり、特に上級藩士から不満が出たが、米沢藩では政治問題には発展しなかったと述べられました。

両先生のお話から、いずれにしても、東北諸藩では装備も訓練も薩長に劣っており、勝てる見込みはなかった戦争であったということになるかと思われました。

第2回講座：平成31年2月10日（日）

久しぶりに自然科学分野のお話で、下記の講義がありました。

講座③「高島町とその周辺の鉱山」

五十公野裕也氏(山形大学理学部)

自然科学分野では数年ぶりの開講となりました。五十公野先生が得意とされている分野から「高島町とその周辺の鉱山」という演題での講義がありました。はじめて当館にお出でいただいた方も含め、多くの参加がありました。参加者の皆さんも知らなかった鉱山も少なくなく、講義後に行われた参加者も交えた懇談では鉱山に関する多方面からの議論で盛り上がりました。「鉱山」に対する関心は高く、かつて鉱山でお仕事をされていた方の参加もあり、参加者数が当講座としては久しぶりに40名を超えました。終了後も、鉱山に関連する講座をまた開講してほしいという要望が寄せられるとともに、参加者間での新たな交流も生まれています。

第3回講座：平成31年3月3日(日)

置賜の伝統的地場産業をテーマとして、下記の二つの講義がありました。

講座④「やまがたの無形文化財 深山和紙～守り伝えるための地域づくり～」

高橋 信博氏(山形県地域づくりプランナー)

講座⑤「白鷹紬～生業(なりわい)について～」

守谷 英一氏(東北芸術工科大学)

第3回講座のテーマは「置賜の伝統的地場産業」ということで、深山和紙については山形県地域づくりプランナーとしてご活躍中の高橋信博氏から、「白鷹紬」については民俗学研究者で東北芸術工科大学非常勤講師の守谷英一氏から講義をしていただきました。

江戸時代から伝わる深山和紙は昭和55年に県の無形文化財に指定されましたが、和紙の需要の減少により、今から20年前にはかつて40戸あった和紙漉き農家が2戸になってしまい、その2戸も今すぐにでもやめたいということで存続が危うくなったことをうけ、相談を受けた地域プランナーの高橋氏は「いきいき深山郷づくり推進協議会」を立ち上げ、仕掛け人として活動を開始したとのことでした。「深山生き生き 行きたくなる郷」のローガンのもと、外部から人を呼び込んでの四季を通じた様々な体験活動や深山の色・草花・樹を決めて、屋根や壁の色を塗り、植栽・植樹を行い、街灯の統一も行ったとのことでした。2戸に減った和紙漉き農家に加え推進協議会に営農部を設置して、共同作業で和紙の原料となる楮を耕作放棄地に育て、14工程にも及ぶ和紙づくりのなかの力仕事の多くを営農部の皆さんに分担していただくようになったこと、こういった活動が新たな紙漉技術者の誕生につながり、これが、深山和紙の再興に大きな役割を果たしたということでした。現在の深山和紙の技法は昔のままでありながら、品質は歴代最高のものとなっており、作った和紙は引く手あまたであるということでした。さらに、「紅」、「紙」、「織」という糸偏の文字の伝統産業と共にそれぞれの振興につながる新たな試み(仕掛け)も進んでおり、リンゴや紅花の入った和紙を漉き、和紙の「からめ糸」の製造で特許も取得したということでした。地域の宝・伝統を再認識し、誇りの持てる地域環境があれば、若者はふるさと回帰する、20年にわたって続けられている壮大な「現場での実験結果」は、確実に若者のふるさと回帰につながっているということで、「そこに住む人自信と誇りの再生」こそ地域づくりの成功の秘訣というお話は受講者の心を打つものでした。

守谷氏からは学位を取得された「生業(主に手仕事)を視点とした地域研究」の一例として「白鷹紬」のお話をいただきました。最初に「白鷹紬」は置賜紬の一員として「伝統工芸品」に指定されていること、2007年に「本場米琉(白鷹板締小絣)」として山形県指定の無形文化財に指定され、現在は白鷹町の2軒の工房でしか生産されていないこと、絣糸の染色に用いられる「板締め」染色法は東京都の「村山大島紬」(東京都指定無形文化財)と「白鷹紬」しか残されていない貴重な技術であることという概要の説明がありました。次に「白鷹紬」の系譜についての説明があり、米沢織りと白鷹紬・長井紬についてその開始・担い手・産地・生産の季節性・使用糸、製品の観点から違いの指摘がありました。米沢織りは米沢藩の殖産興業政策から始まったのに対し、長井・白鷹紬は農民の自給品であり、担い手は家臣団の妻女と農家の女性、産地は米沢城下と下長井北部、生産は米織りが通年であるのに対し、長井・白鷹紬は冬期間の生業要素の一つであったこと、使用された糸は繭から繰り出した絹糸に対し、真綿から紡いだ紬糸であったことなどの相違点を指摘されました。板締染色は明治37年に導入され、翌年には独立した染色業者と板大工も生まれるなど瞬く間に普及したということで、この技法の普及で長井紬と白鷹紬の区別が顕在化しやがては両者が分離したとのことでした。白鷹紬は農家の冬期間の生業の一つで機織り工場(機屋)は発達せず、今でも織り手は出来高払いの賃金、労働時間は自分で決める独立した事業者であり、そこには次のようなアイデンティティが認められるということです。①自己の身体がものを生み出す存在であること(誇りであり、喜びでもある)。②ものを作ってきた歴史に位置付けられる自己(伝承の意義)。③ものを生み出した土地、家族に結びつく自己(帰属意識)。これらは、現代のもの作りが機械化・自動化の中で失われてきたものであり、守谷氏は白鷹紬の生産形態から次のような考えを示されました。現在の産業社会を支配する機械文明は、生産活動から身体性を排除する方向で動いている。それだけでなく、生活維持のための諸活動から身体性を排除することが進歩や発展と考えられている。しかし、自分の手で何かを作ることは、人間にとって根源的な喜びであるといえ、生産過程に身体技術を残存させている産業を批判的に検討することが本来の生活に資する知見を生み出すのではないかと。守谷氏のお話でもまた効率化を追究するあまり、大切なことを忘れ去ってしまいがちな現代に生きる私たちにとって警鐘となるものでした。

📍 2018年度山形の考古資料検討会が行われました

2月3日に山形考古学会との共催で平成31年度の考古資料検討会が開催されました。

参加者は40名弱でした。内容は下記の通りでしたが、過年度調査分も含め濃い内容の報告をいただきました。

〈基調報告〉

「2018年県内の発掘調査の概要」 山形県教育庁文化財・生涯学習課

〈調査報告〉

「大南遺跡」 米沢市教育委員会 佐藤公保氏

「南森遺跡」 南陽市教育委員会 角田朋行氏

「上屋地B遺跡」 飯豊町教育委員会 高橋拓氏

「日向洞窟遺跡範囲確認調査」 高畠町教育委員会 水口哲氏

「日向洞窟遺跡とその周辺」 日向洞窟遺跡調査団

📍第1回物流・交流を考える会が当館で開催されました

2月16・17日に、これまでの「アスファルト研究会」をリニューアルした「第1回物流・交流を考える会」が当館で開催されました。北は北海道、南は東京都から、29名の参加がありました。16日の午後は岡村道雄氏の「物流・交流の考古学のこれから」という基調報告を皮切りに、沢田敦氏の「アスファルト研究会の成果と今後の課題」、秦昭繁氏の「珪質頁岩の資源環境の特徴」、菅原哲文氏の「最上川流域の複式炉」、福井淳一氏の「弥生・続縄文の漁猟具にみる交流」の4本の研究報告がありました。夕方から米沢市内で懇親会、17日は押出遺跡の出土品や山形県教委が所有する他地域との交流を示す土器や県外から搬入された磨製石器等の見学会を行いました。そして、今後も「物流・交流を考える会」を継続して開催することを確認して散会しました。充実した2日間でした。

♥平成31年度の館事業について

2月6日の運営協議会で平成31年度の事業計画が承認されました。現在「催し物案内」を作成中ですが、その概要は下記のとおりです。皆様の積極的な参加をお待ちいたしております。

展示事業

1. 常設展示室

基本的に現在の形を継続する。古代以降については、企画展示を実施しない時期に、企画展示室を使用して常設展示に続く通史的な展示を行う。併せて解説シートを作成し、展示の内容をコンパクトに解説する。

2. 企画展示室

特別テーマ展「花沢 a 遺跡と置賜の縄文時代中期後半の世界」

6月8日(土)～9月8日(日)

米沢市教育委員会が平成29年度に実施した発掘調査で検出された縄文時代中期末の集落「花沢 a 遺跡」の出土資料と、置賜の中期末の資料を展示する。花沢 a 遺跡以外の米沢市内の資料や高畠町・長井市・小国町の資料も展示する。

第27回企画展「縄文時代後期の山形」

9月14日(土)～12月1日(日)

当館でのこれまでの展示で取り上げることがない縄文時代後期に焦点をあて、県内4地域の土器や石器等を展示する。

〈展示構成〉展示遺跡候補：米沢市竹井境、左沢、大樽、大清水、野際、高畠町石ヶ森、長井市小山、空沢、唐梅、飯豊町町下、郡之神、小国町千野、山形市向山、天童市砂子田、上山市泥部、寒河江市高瀬山、富沢 I、西川町的場、村山市川口、作野、最上町かつば、水上、戸沢村津谷、鶴岡市砂川 A、遊佐町小山崎、神矢田他。

上記以外の期間は「古墳時代から中世の考古資料」を展示する。

普及啓発事業

1. 体験事業

(1) 「赤ちゃん手形をつくろう」

4月30日(火)～5月5日(日)

※今年も会員の皆様から、準備と当日のお手伝いのボランティアを募集しますのでよろしくお願ひいたします。

(2) 「勾玉・弓矢・石器をつくろう」

5月25日(土)・7月13日(土)・11月3日(日・祝)

(3) 「ガラス玉をつくろう」

6月15日(土)・11月30日(土)

(4) 「からむしで布をつくろう」(あんぎんをつくろう)

6月15日(土)・11月30日(土)

(5) 「古代風プレスレットをつくろう」

6月22日(土)・11月3日(日・祝)

(6) 「大人の自由研究」

7月20日(土)・12月14日(土)

2. 遺跡・資料館をめぐる

(1) 春の遺跡めぐり 5月26日(日) 最上地域方面を予定

(2) みる・きく・ふれる遺跡の旅 6月30日(日)～30日(日) 栃木県を予定 年々参加者が減少し、催行が危ぶまれる状況となっています。今年は栃木県の1回目ということで、芹沢清八氏(元栃木県埋蔵文化財センター)から案内していただきます。

(3) 秋の遺跡めぐり 10月5日(日) 蔵王町を予定

研修事業

考古学への関心の裾野を広げる事業を行う。

1. 特別テーマ展関連講座

特別テーマ展に関連した講座を開催。6月・7月の週末で、全3回の予定。

※講師陣は予定

第1回(6月23日(日))

- ・花沢 a 遺跡の調査と出土品
- ・米沢市内の縄文時代中期後半の遺跡

佐藤智幸氏(米沢市教委)
手塚 孝氏(米沢市教委)

第2回(7月7日(日))

- ・高島町の縄文時代中期後半の遺跡
- ・長井市の縄文時代中期後半の遺跡

井田秀和氏(高島町教委)
岩崎義信氏(長井市教委)

第3回(7月14日(日))

- ・小国町の縄文時代中期後半の遺跡
- ・置賜の中期後半の炉と土器の変遷

阿部明彦氏(考古学協会員)
菅原哲文氏((公財)山形県埋蔵文化財センター)

2. 第21期考古学セミナー

企画展のテーマに沿った考古学セミナーを開講し、企画展の展示資料について理解を深める。

※講師陣予定

第1回(9月29日(日))

- ・置賜の縄文時代後期の遺跡
- ・村山の縄文時代後期の遺跡

手塚 孝(米沢市教委)
植松暁彦 ((公財)山形県埋蔵文化財センター)

第2回(10月6日(日))

- ・最上の縄文時代後期の遺跡
- ・庄内の縄文時代後期の遺跡

水戸部秀樹 ((公財)山形県埋蔵文化センター)
大川貴弘 (日本考古学協会員)

第3回(10月13日(日))

- ・縄文時代後期の住居と遺構
- ・縄文時代後期の石器

菅原哲文 ((公財)山形県埋蔵文化財センター)
渋谷孝雄(考古資料館)

3. 第27回企画展 記念講演会

11月17日(日)

「山形(東北)の縄文時代後期について(仮題)」小林圭一 ((公財)山形県埋蔵文化財センター)

4. 博学連携での夏休み中の事業

小中学生を対象とした下記の事業を行う。

1日体験学習「スクールオブジョウモン」

- ① 目的 様々な縄文体験を通して考古学に対する興味を持ち、自由研究等にも役立てる。
- ② 日時 8月9日(金)
- ③ 対象 小学生 15名程度
- ④ 内容 弓矢の的当て、石器づくり見学・石器で野菜を切る、火おこし(調理)、縄文原体を生地に押しつけ土器片形クッキー(ドッキー)をつくる、館内見学。